

『狐物語』 B写本第 5921-22 行を巡る新旧校訂の比較⁽¹⁾

高 名 康 文

2013年に、Champion classique叢書から『狐物語』B写本（Paris, BN f fr 371写本）の古フランス語－現代フランス語対訳本の第一巻が出版された⁽²⁾。この写本には、1948年から1963年にマリオ・ロックがChampion社のCFMA叢書から出版した校訂本がある。その死により第6巻をもって中断していたが、1999年にフェリックス・ルコワが第7巻を加えて完結させた⁽³⁾。

ロックは、もとの所有者の名前からカンジェ（Cangé）写本と呼ばれるパリ国立図書館フランス第371写本⁽⁴⁾のテキストをできるだけ忠実に再現するということを校訂の方針としてあげている⁽⁵⁾。できるだけ、というのは、一行八音節、平韻という構造が明らかに破綻しているとか、意味が通らないことが誰の目にも明らかに分かるという場合は、近い系統の写本の読みをもとにテキストの修正を試みるが、テキストがまかりなりにも意味を伝え、形式的にも破綻していない場合は、そのままにするということである。これは、19世紀に写本の系統図をもとに、人工的にオリジナルのテキストの再現を目指したラハマン法という校訂法が、結局のところ、存在したこともないテキストを作るのに貢献しているとした20世紀初頭の文献学者ジョゼフ・ベディエの主張を受けたもので、ロックによる『狐物語』B写本の校訂は、そのもっとも忠実な実践に位置づけられる⁽⁶⁾。

この校訂については、あまりにも写本のテキストに従属的すぎるところがあるかと思えば、恣意的に思える変更があるところが見受けられるという批判があった⁽⁷⁾。新しい対訳本は、亡くなったデュフルネの他、定年退職を迎えたシュブルナら『狐物語』研究の大御所が参加しており、時間をかけて読みの改良を行っていることが期待される。もともとは、『狐物語』の中で最初に書かれたとされている作品の中で、鳥のチェスランとチーズのエピソードと、エルサンの強姦のエピソードにあたる、この写本での第VIIa枝

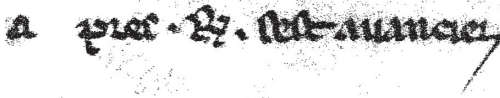
篇、約 500 行を検討して、部分的にその問いに答えるつもりであったが、まとめるに至らなかった。そこで、本論では二行のことであるが、両校訂の間で物語の展開が変わってしまっている例をとりあげ、それぞれの校訂を批判的に検討する。さらに、写本の継承伝統をふまえつつ、なぜ写本の伝承過程で意味に関わる混乱が生じたのかについて類推をする。

ロック版『狐物語』 5921-22⁽⁸⁾ の修正について

ロック版でいえば、第 5921 行から 22 行にあたる部分の読みが新しい校訂では修正されている。これについてとりあげることから始めたい。有名な穴蔵でのエルサンの強姦の場面に先だって狼の夫婦が、ルナールを追跡する場面であるが、修正は物語の解釈に関わってくる。

	<i>ROQ.</i> v.5917-5925	<i>CH_CL.</i> ⁽⁹⁾ br. VII, v.367-375
	Hersant a enforcié son poindre,	Hersant a enforcié son poindre,
	qui a Renart se vodra goindre;	qui a Renart se vodra goindre.
	vit Isangrin <u>qui</u> a failli,	Vit Isangrin <u>qu'i</u> a failli,
	que Renart d'autre part sailli;	que Renart d'autre part sailli;
5921	après Renart s'est <u>avancie</u> .	après Renart s'est <u>avanciez</u> .
5922	Renart <u>la</u> vit si <u>adrecie</u> ,	Renart <u>le</u> vit si <u>adrecier</u> ,
	ne s'ose a lui abandoner,	ne s'ose a lui abandoner,
	ainz ne fina d'esperoner	ainz ne fina d'esperoner
	jusqu'a l'entree d'un val crues.	jusqu'a l'entree d'un val crues;
	(下線は高名による)	

問題とする第 5921、5922 行および、第 5911 行の *qui* の読みを除けば、句読点の位置を除けば違いはまったくない。この箇所は、写本ではこうなっている⁽¹⁰⁾。それぞれ、下に筆者による転写を記す。



(B 写本 50 葉表右欄)

Après .R. sest auancier



(同上 50 葉裏左欄)

.R. leuit siadrecier

ロック版の *apparat critique* では、写本のテキストに施した修正について以下のように示している⁽¹¹⁾。

5921 après Renart s'est avancie. [avancier (cf. *K*)]

5922 Renart la vit si adrecie, [le (cf. *L*); adrecier (cf. *KL*)]

この二行は次のように訳せる。「[エルサンは] ルナールの後を進みました。ルナールは彼女の容姿を美しいと思いました。」(本論 138 頁以降を参照のこと。) カギかっこの中に示されている綴りが底本である B 写本にあるもので、それを K 写本や L 写本の読みに基づいて修正したという意味である。第 5921 行について、ロックは不定法の *avancier* を *avancie* という過去分詞の形に訂正したとしている。しかし写本の画像を見ると、上の行の最後の文字は、

「r」ではなく「z」であることが確認できる。例えば、50 葉裏でいえば、右列 7、8 行末に同じ形の文字があるが、ロックはそれぞれ «soiez» (5897)、«loiez» (5898) と転写している。これに対して *CH_CL* の校訂者たちは、ロックのロックらしくない間違いを正した上で写本通りの読みを提案しているといえる。

CH_CL が提示している文は、「ルナールの後ろを進んでいきます。ルナールは、その者がそのように向かってくるのを見ました。」と訳せる。「その者」が誰を指示するかは、文法的に特定できる。*CH_CL* と B 写本の示すテキストでは、avanciez の最後に z がついている。これは、主格と資格^{ひんかく}を区別する古フランス語では、男性・単数・主格であることを指示するもので、この複合過去の再帰的代名詞の se、すなわち主語は男性であることを意味する。つまり、B 写本によると、ルナールをその穴蔵に向かって追い詰めているのは、夫婦のうちのイザングランである、ということになる。*CH_CL* には対訳がついているが、ここの箇所の対訳は以下の通りである。

Hersant s'élance à toute vitesse dans son désir de le joindre. Isengrin voit qu'il a manqué son coup, que Renart a sauté d'un autre côté : il se précipite à sa poursuite. Renart, le voyant lancé, n'ose pas se mettre à sa portée : il pique des éperons de plus belle jusqu'à l'entrée d'un vallon creux. (*CH_CL*, p.479. 下線は筆者による。)

すなわち、エルサンが、全力でルナールに追いつこうと馬を走らせる。一方、イザングランは、ルナールに攻撃をしかけるが、ルナールが横道に跳びのいたので失敗する。そこで、下線部だが、イザングランはルナールを追いかけ

て突進する。ルナールは、はや賭けしてくるのを見ると、彼の手に届くところにいる勇気がない、と書かれている。そこで落ちくぼんだ谷の入口まで拍車をかけていく、というわけである。

山田齋によるこの枝篇の翻訳「ルナールの冒険」⁽¹²⁾を読んだことがある方は、この解釈について、違和感を覚えるに違いない。夫婦のうちイザングランが道はずれて、エルサンのみが狐の巣穴まで追いかけていき、そこで上半身を詰まらせるが、一人であるがゆえに狐に陵辱されてしまうというのが、その方の知る『狐物語』のはずである。引用文の直後には、エルサンが一人でルナールの巣穴に到着する場面が、イザングランにはぐれたという断りなしに続くが、これは唐突である。B写本の読みは文法的には意味が通じるが、ここはやはり、イザングランがはぐれてしまう場面ではなくては具合が悪いのではないだろうか。後で述べるように山田訳は、B写本とは別の写本群に属する写本を底本とした校訂本によるものである。ロックによる修正の背景には、そのようなテキストの存在があるのだろう。

写本通りの読みには、そのような物語の展開上の問題ばかりでなく、作詩法上の問題も伴う。すなわち、*adreciez* と *avancier* の韻であるが、語尾の /ts/ や /t/ という子音が消滅するのは、13世紀になってからのことなので、この作品が成立したとされている12世紀末のものではありえない⁽¹³⁾。電子テキストを作ってロック版の韻を調べてみたところ、このような例は他には見いだせなかった。

しかしながら、先に紹介したベディエ以降のなるべく写本のテキストを活かすという考えに基づくのであれば、これは正しい措置であるといえる。原野昇が、1993年の『レイナルドゥス』誌特別号において、リシュネルとPh.メナールらによる「ベディエ主義」批判を紹介し、それに対する批判を

試みた論考⁽¹⁴⁾に簡潔に示した考えを以下に要約する。中世の写字生は、自分の前にある写本を書き写したが、その写本に間違いがあったり、その写字生の時代には意味が通らないというようなことがあれば、自分にとって意味の通る形に修正して筆写した。写本の画像や校訂本を集めて、目の前に並べることができる現代の研究者であれば、作者によるテキストがどのようなものであったか推測することも可能であるが、写本のテキストはそのような環境で生産されていない。オリジナルはこうであったはずだからという考えによって、テキストを変更して示すことは、その時代においてテキストがいかにかに受け取られていたか、その時代の言語の姿がどのようなものだったかという、写本が示している証言が目の目にあたる機会を奪うという結果をもたらす。だから校訂者は、写字生が自分のテキストを見直した時にどうするかということ、写本全体、さらにはできるだけ多くの同時代のテキストを参照して想像し、誤りと考えて訂正するだろうと思われる時のみ訂正するべきである。

この考えにもとづくなら、この部分は、写本が成立した 13 世紀末から 14 世紀のはじめに、語尾の子音の *r* や *z* が読まれなくなった時代に緩くなった作詩法を反映しているものということになる。*CH_CL* のこの部分の校訂テキストは、現代においてこの物語を巡る通念となっている展開とは異なるが、写字生にとっては意味が十分に伝わると考えたであろうテキストが B 写本にあることを提示しているといえる。

それだけではない。ルナールを追跡するのはイザングランとするこの読みは、その後、 γ 系の写本での読みで踏襲される。ヘルマン・ビュットナーが『狐物語』の全主要写本を調査してうちたてた系統図(図 1)⁽¹⁵⁾にしたがえば、 γ 系とされる三写本は、 α 系と、B 写本が属する β 系の写本を参照して

作られた。

Et Hersant s'esforça de poindre,

Qui a Renart se voldra joindre.

Vit Ysengrin si a failli,

Que Renart d'autre part sailli.

Ysengrin se rest adreciez.

De ce fu Renart correciez,

[...]⁽¹⁶⁾

(試訳 エルサンは、力を入れて馬に鞭を入れます。ルナールに追いつこうというのです。イザングランが目に入りますが、しくじります。ルナールが横道に跳びのいたからです。イザングランは追いかけて直します。ルナールは憤りますが、〔…〕)

以下は、B 写本と同様である。引用箇所の下から二行目が示す通り、 γ 系の写本では、イザングランも穴蔵へと向かったという読みが提供されている。CH_CL.のテキストは、ロックが修正して、*apparat critique* に追いやってしまっていたがゆえに、注目されることがなかった重要な箇所の理解に関わる影響関係を活字の世界で明らかにした。これは、この物語の研究にとってありがたい貢献であるといえる。

一言難をつけるとすれば、他の写本の読みや、作詩法上の問題に関する言及が一切ないために、このシリーズが対象にしているであろう古フランス語の初学者にとっては不親切ともいえる内容となっているともいえるのではないかとも思われる。

α系写本とH写本の読みについて

以上の説明から、B写本や、その、というよりおそらくはそのもとになった写本の影響下にあるγ系の写本は、この物語の伝承の果てに、作者の意図や当初の聴衆の受け取り方が分からなくなった時代における作品受容のあり方を伝えているものだということが理解されるだろう。たしかに、B写本は、上記の系統図に従って言えば、β系の写本の中でもその末端に位置しているものである。しかし、この箇所に関しては、伝承のごくごく初期の段階で、ルナールを追うのがエルサンなのかイザングランなのか曖昧になる種がまかれていたと類推される。このことについて以下に説明をしたい。

図1の系統図に関してごくかいつまんで説明するなら、α系の写本とβ系

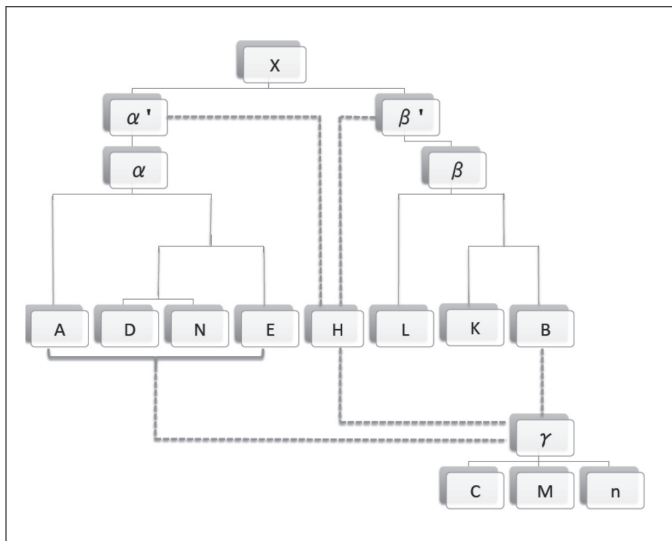
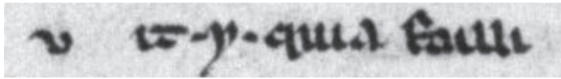


図1

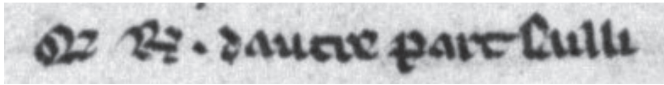
の写本があり、それらの両方を参照して作られたものとして、H、 γ 系の写本があるということが読みとれる。

まず、 β 系でロック版の5919、5920行にあたる箇所を示すことで、どういう誤解がありえたのかということを説明したい。B写本（第50葉表右列から同葉裏左列）をもとに他のK写本（第249葉表中列）L写本（第10葉裏右列）の読みを示すと以下の通りになる。

B写本



Uit .Y. quia failli [quil a L]



Q'R. dautre part sailli [.R. a L]

画像の下にまず、B写本のトランスクリプションを示し、KとLのヴァリエーションを [] の中に示している。そこにあるように、ルナールとイザングランは、それぞれ頭文字のRとY一文字に略されており、また、第5920行冒頭のQueは略号で示されている。また、uとvやiとjは中世の写本では区別されていなかったもので、今の綴りでいえばvで示される文字はこのように転写される。

この箇所の意味をとくに曖昧にしているのは、登場人物が略号で示されていることだ。さきほど、代名動詞の複合過去の過去分詞の形で説明したように、古フランス語には、主格と賓格があり、男性名詞が主格の場合は語末に

-sがつく(-tsとなれば-zと綴られる)。しかし、この例のように略号が使われた場合は、主格なのか賓格なのかが分からなくなってしまう。これに加えて、主語と動詞の語順は現代フランス語と比べて自由なので、文脈に頼らないと主語か補語かは同定できない場合がある。

また、quiの綴りに関しては、イザングランにかかる関係代名詞のquiと理解することもできるし、接続詞のqueと中性代名詞iのエリズィオンと理解することもできる。さらには、代名詞iは、中性代名詞のiの他に、主格で男性単数の代名詞ilの別形であることもある。すなわち、第一行目は、主語をエルサンとして、「エルサンは(ルナールを攻撃しようとして)失敗したイザングランを見る。」とも、「エルサンは、夫が攻撃の試みに失敗したと理解する。」とも、「エルサンは、夫が失敗したと理解する。」とも理解できる。また、イザングランを主語として、「自分は攻撃の試みに失敗したと理解する。」とも、「自分は失敗したと理解する。」ともとれる。

もしも、このような曖昧さが、β系に独特のことで、オリジナルから発したもう一つの系列であるα系では意味が明瞭にとれるということであれば、そちらがオリジナルに近いということになるであろう。そのような見込みでα系の写本でこの場面に対応する箇所を検討する。この系列の写本にはE.マルタンの校訂⁽¹⁷⁾がある。そこで底本となったA写本は、エルサンの強姦の場面を収めていないため、マルタンはここではD写本を底本としている。以下には、まずマルタン版における枝篇番号と行番号を記し、次にD写本(第32葉表右列)、E写本(第35葉裏と第36葉表)、N写本(39葉裏左列)のテキストを転写する。D写本のみ、右に現代語の単語の分割に従った読みを、句読点をつけずに示すことにする。

MAR. II, 1243

D Dist .Y. quil la failli Dist Ysengrin qu'il l'a failli

E Dist .Y. qui a failli

N Voit .Y. quil a failli

MAR. II, 1244

D Q' .R. dautre part sailli Que Renart d'autre part sailli

E Que renart dautre part failli

N Quar .R. dautre part sailli

MAR. II, 1245

DN apres .R. sest adrecie Après Renart s'est adrecie

E apres .R. cest adrecie

MAR. II, 1246

DE .R. le vit si coroucie Renart le vit si couroucie

N .R. la vit si coroucie

一行目の最初の動詞に *vëoir* 「見る」ではなく *dire* 「言う」の単純過去 *dist* をおく D 写本と E 写本とでは、主語はイザングランに違いない。「イザングランはしくじったと言った。」という意味である。N 写本であれば「エルサンは、イザングランがしくじるのを見る。」その後の二行は、不定詞が *-ier* で終わる第一群規則動詞の過去分詞で終わっている。主格と賓客の区別が厳密であれば、第三行と第四行の主語は特定できる。エルサンである。

最後に述べたことについては、現代フランス語から考えると意外に思われる方もいるだろうから、説明をする。adrecie と courroucie は、それぞれ不定詞が -ier で終わる第一群動詞の過去分詞である。三行目の主語が男性名詞であれば、性・数・格が一致するので語末に -s がつく筈である。女性形であれば、-e がつくはずでは、ということになるが、ここは、ピカルディー、ノルマンディーなどのフランス北部・北東の方言の形が使われているのであろう。-ier 動詞の過去分詞の女性形の語尾のイエ（ウ）/ieə/ という音のエ /e/ という音は、前のイに吸収される⁽¹⁸⁾。なので、この方言での読み方はアドレチウ /adretʃiə/ とクルチウ /kuruʃiə/ で上記のように綴られる（さきに示したロック版第5921行の解釈もこれによる）。さらに、D写本とE写本の4行目に見いだされる le という形も、北部地方の特徴で、代名詞の la は、所有形容詞の ma, sa, ta が me, se, te という形になるのと同様に、イル・ド・フランスの男性単数の le と同様の形になる⁽¹⁹⁾。

オイル語のある方言が基調になったテキストに、他の方言の特徴が混じりこむということは、特にピカルディー方言の場合よくあることである。フランスのシャンパーニュ地方で活躍したクレチアン・ド・トロワの言語にも、韻の部分などでその特徴が見られる語法が見られることがある⁽²⁰⁾。

DEN とも、以上のような解釈で、Eが第1244行で failli という明らかに間違った形をとっている（前行と韻を踏むのに同じ単語が使われている）ことを除けば、破綻なく理解することができる。おそらくは、これらが現存する写本の中ではもっともオリジナルに近い形であろう。E. マルタンの校訂⁽²¹⁾では、以下のようになっている。

MAR. II

1243 Vit Ysengrin qui l'a failli, (Dist y. quilla)

1244 Que Renars d'autre part sailli.

1245 Apres Renart s'est adrecie. (cest)

1246 Renars la vit si couroucie

1243 Voit *N* Dist *E* qui a f. *EN*1244 failli *E*1246 le *E*

右にかっこでくくって記したのは、マルタンが修正する前はこうだったとして示す D 写本の読み、下に記したのは、マルタン版の *apparat critique* から EN の異読を書き抜いたものである。先に示した我々の読みとくらべると、不思議なことに、第 1244 行の N 写本の Quar は載っていない。第 1245 行の cest は D 写本ではなくて E 写本の形である。第 1246 行では D 写本の le を la に修正しているのにも関わらず、そのことは示されていない。また、これは北部方言の形ととれば意味が通るのだから、写本にできる限り忠実に従うというベディエの方針をとるとすれば、変更する必要のないところである。しかし、言うまでもなく、マルタンの時代には、この方針は存在しなかった。

CH_CL. の校訂者の一人ジャン・デュフルネが、また別の対訳本でマルタン版のこの箇所を翻訳しているので、引用する⁽²²⁾。

Quand elle vit qu'Isengrin l'avait manqué,
car l'autre avait changé de direction,

elle emboïta le pas au goupil
 mais, comme elle avait l'air fâché, [...]

イザングランがいなくなってしまったので、エルサンガルナールを追跡する
 というようになっている。このように解釈できるマルタン版が、山田審訳
 「ルナールの冒険」の底本になっているというわけである。

ここで検討した *a* 系の写本には、特に目立った方言特徴はないとされている
 のにも関わらず、ここでは北部方言の特徴が共通して現れている、という
 ことになる。この特徴が、他の系統の写本にも見ることができれば、この箇
 所の北部方言に由来すると考えられる読みが *a* 系独自のものではなくてオリ
 ジナルに遡ることの証拠になるが、どうであろうか。ここで B 写本の 5921-
 5922 にあたる部分は、*CH_CL* からの引用で示した通りであるが、これらを
 K (第 249 葉表中列) L (第 10 葉裏右例) と一緒に示す。ここではそれぞれの
 の写本の読みの横に、句読法を示さない形で筆者の読みを示す。

B 5921 après Renart s'est avanciez.

K Après .R. est adrecie → Après Renart est adrecie

L Atant sentort a corrocie → Atant s'en tort a corrocie

B 5922 Renart le vit si adrecier,

K .R. le vit si avancie → Renart le vit si avancie

L .R. la vit si a avancie → Renart la vit, si a avancie

a 系の写本群で、北部方言の特徴をなしている代名詞の *le* も、*-ier* 動詞の過

去分詞の形も確認できる。Kの一行目の *est adrecie* は、*adrecier* の自動詞としての用法（「向かう」）の複合過去だろう。主語はエルサンともイザングランとも解釈可能である。主語をエルサンととれば *adrecie* は、北部方言の女性・単数・主格の形でアドレチウ /*adretʃiə*/ と読む、ということになる。であれば、次の行の過去分詞も同様にアヴァンチウ /*avütʃiə*/ と読み、*le* は女性の代名詞ということになる。すなわち、*a* 系と同様に解釈できる。ただし、男性名詞単数主格を示す語尾の *-s* は、しばしば落ちるので、これらが男性形でイザングランを指示しているということもありえる。Lのテキストに関しては、*a corrocie* の意味がよくわからない。次行の *avancie* は、主語が男女のどちらであれ、男性形の過去分詞になるはずなので、アヴァンチエ /*avütʃje*/ と韻をふみ、クルツチエ /*kurutʃje*/ と読むということになるが、*a corrocie* という表現は辞書にあたって出てこない。写字生がよく理解しないで写している可能性もある。しかし、それだけにかえて、*a* 系の写本で共通してでてきた *corrocie* と綴りが同じものが出てきていることが注目される。ビュットナーの系統図に従えば、*β* 系写本の L で理解されているか怪しい *corrocie* という要素が *a* 系と共通しているということは、これがオリジナルに由来することを強く示唆する。

ここで、*a* 系にも *β* 系にも属していないため、ここまでとりあげてこなかった H 写本に注目しよう。これは、ビュットナーの系統図では、*a* 系と *β* 系の両方に由来するものとされている。ただし、ビュットナーはまた、H か、あるいはそれに遡る写本編纂者は、*a* 系と *β* 系の写本の両方を参照しながらも、枝篇ごとにこの作品に関してはこちら、ということを決めていたということを行っている。ここでとりあげている B 写本の第 VII 枝篇は、*β* 系を参照しているとしている⁽²³⁾。今回、第 VII 枝篇の前半のチェスランと

エルサンのエピソードの全体をB写本と照らし合わせながら確認したが、削除や挿入による行番号の異動がほとんどないことから、ビュットナーの言っていることが正しいことが実感できた。注目すべきは、系統図に従えば、BKLといった現存するβ系の写本よりもオリジナルに近いところから枝分かれしてきていることである。この写本の読みがα系と共通していれば、BKL写本よりもオリジナルに近い読みであると推測されるということである⁽²⁴⁾。また、この写本は、13世紀後半のもので、テキストをフランス北部のピカルディー方言化する特徴があるとされている⁽²⁵⁾。これまで検討してきた箇所、この写本における対応箇所は以下の通りである。ここでも写本の筆写を左に、句読法を示さない形で筆者の読みを右に示す⁽²⁶⁾。

H写本（第70葉表右列）

Voit yseng' qui a falı	→ Voit Ysengrin qui a falı
Q' R. d'autre part sali	→ Que Renart d'autre part sali
apres sest H. adrecie	→ Aprés s'est Hersent adrecie
R. la vit mlt' corecie	→ Renart la vit molt corecie

adrecie, corecie という過去分詞をα系の写本と共通して持っている。β系の写本の傍証と照らし合わせれば、fali : sali, adrecie : corecie という韻がオリジナルにあったということは明らかである。さらに、一見して分かるように、これまで検討してきたどの写本よりも曖昧さが無い。誰がルナルを追跡しているか、というところでエルサンの名前が出てくるのはこの写本だけである。ピカルディー地方出身の写本編纂者は、オリジナルの写本がもつ北方方言の特徴を完全に理解すると同時に、自分の地方以外の者が写本を目にし

た時に誤解がありえることに気がついたのだろう。それを避けるために、エルサンの名前を入れたのではないだろうか。北部方言化する癖があるという写字生が、そのままでも通じる *le* をわざわざ *la* にかきかえたというのは、曖昧さの回避しようという意識がそうさせたからだと推測する。

以上に、ロック版『狐物語』の第 5921、5922 行にあたる部分のオリジナルには、北部方言の特徴があり、そこからくる曖昧さが、写本伝承の過程において、解釈の混乱を生じさせたという推論を書いた。『狐物語』のこの部分は、この物語群の中でも最初に書かれたという説が有力であるが、その作者がノルマンディー地方で活躍した人物であったという仮説が、近年『ロマニア』誌に発表されている⁽²⁷⁾。本論では二行しか取り扱っていないので、何とも言えないが、今回とったような方法の研究を続けてこのような特徴が見つかるのであれば、ノルマンディー起源説の検討に貢献することになるかもしれない。

ロックの修正について

最後に以上の議論をふまえて、マリオ・ロックが B 写本に施した訂正を検討したい。この修正はおそらく第 5921 行の *avanciez* を *avancier* と読み間違えたことによるものだろう。正しく読めていれば、ロックの方針からいって、*CH_CL* の校訂者たちと同じように変更をしなかっただろうことが推測できる⁽²⁸⁾。しかし本論では、ロックの修正自体にも問題があることを、指摘しようと思いつつ、ここまで指摘できずにいる。さらに、さきほどとりあげた H 写本のこの箇所をロックが校訂の際に道具 (*manuscrit de contrôle*) として使っていれば、修正の仕方が異なっていたと思われるのである。この事

実を指摘することで、今回、ごくごく一部のみを論じた両校訂本が抱えている問題も浮かび上がるかと思う。

上で紹介したロックのテキストと、第 5921、5922 行にほどこした修正は以下の通りである。

ROQ.

Hersant a enforcié son poindre,

qui a Renart se vodra goindre;

vit Isangrin qui a failli,

que Renart d'autre part sailli;

5921 après Renart s'est avancie. [~~avaneier~~ avanciez (cf. *K*)]

5922 Renart la vit si adrecie, [le (cf. *L*) ; adrecier (cf. *KL*)]

ne s'ose a lui abandoner,

ainz ne fina d'esperoner

jusqu'a l'entree d'un val crues.

(下線、打ち消し線は高名による)

第 5921 行の *avancie* も、第 5922 行の *adrecie* も、それぞれ他の動詞の形になっているものを、 β 系の *KL* 写本（実際には *K* 写本）に従って訂正を施している。冒頭にも述べたように、ロックは、B 写本のテキストをできるだけ忠実に再現すること、明らかな間違いの場合がある場合のみ、まずは β 系写本、それが適わなければ α 系の写本も参照するという方針をたてている。ここでも、それに従ったということであるが、*K* 写本からとってきている 5922 行の *adrecie* はいただけないように思われる。このように形容詞化され

た形で、女性を修飾するために使われると、この語は「姿形のよい」という意味になる。(トブラ・ロマチの辞典では、“wohlgestalt”という訳語がつけられている⁽²⁹⁾。)いくら、愛人だとはいっても、追跡を受けている場面には似つかわしくないのではないか。さらにいえば、検討してきた通り、この語は多くの写本に見られるが、この意味で使われている例は一つも存在しない。K写本の例は、「ある方角に向かう」という自動詞の用法(トブラ・ロマの辞典で“eine Richtung einschlagen”と定義されている⁽³⁰⁾)である。つまり、ロックは、自ら避けることを信条としてきた、ありもしない読みを作り出すという罪を犯してしまっているということになる。

ここで、この箇所では β 系に由来する読みを提供しているH写本を考慮に入れれば、第5922行にあたるところに、L写本に共通して *correcie* があることから、ロックもこの語を採用したのではないだろうか。

不思議なのは、ロックが本論で問題にした箇所が掲載されている校訂本の第三巻でH写本を参照していないことだ。第一巻では、さきに紹介したビュットナーの見解を紹介して、H写本は導入部で第一枝篇に関しては β 系を参照しているのだからと述べて⁽³¹⁾、*apparat critique* でヴァリエントを示しており、第四巻から第六巻でも同様をしているというのに。第三巻ではH写本の読みは、K写本L写本の読みに加えて、A写本やH写本でもそうだ、というような形で稀に言及されるのみである。ロックの校訂を批判したりシュネルの論考がロック版の第五巻でB写本の「改良」を提案する際には、この写本の重要性が特に強調されている⁽³²⁾。本論でとりあげた枝篇のように、この写本が β 系に近い読みを提供している場合は、この写本のヴァリエントをあげることが必要だったのではないだろうか。残念ながら、*CH-CL*の新しい校訂でも、この枝篇に関してH写本の読みは検討されていな

い。このことを、両校訂本に共通する小さからぬ問題として提示しておく。

註

- (1) 本論は、2014年6月28日に、成城大学フランス語フランス文化研究会第15回研究発表会における発表「『狐物語』Cangé写本第VIIa枝篇の新旧校訂の比較」の発表原稿に手を加えたものである。中世フランス文学を原文で読む機会のない聴衆を念頭においてのものだったので、専門家にとっては基本的なことについても筆を費やしていることと、その後の勉強をうけて、趣旨に変更を加えていることを最初にお断りしておく。
- (2) *Le Roman de Renart, tome 1 (branche I-XI), édition bilingue établie, traduite, présentée et annotée par Jean Dufournet, Laurence Harf-Lancner, Marie Thérèse de Medeiros et Jean Subrenat*, Paris : Honoré Champion (coll. Champion Classiques, série « Moyen Âge », 2013. 本論では、以下、この版の略号を *CH_CL*. とする。
- (3) éd. M. Roques, *Le Roman de Renart*, 6 vols., Paris, Champion, 1948-1963 および、éd. F. Lecoy, *Le Roman de Renart. Branche XX et dernière. Renart Empereur*, Paris, Champion, 1999. 本論では、以下、ロックによる版の略号を *ROQ*. とする。
- (4) 本論で言及する写本は以下の通りである。写本のアルファベット記号は éd. E. Martin, *Le Roman de Renart*, 3 vols., Strasbourg, Trübner, 1882-87 による。

a 系

A 写本 Paris, BN f fr 20043

D 写本 Oxford, Bodleian, Douce 360

E 写本 London, British Library Add. MS 15229

N 写本 Rome, Vatican, Reg. Lat. 1699

β 系

B 写本 Paris, BN f fr 371

K 写本 Chantilli, Musée Condé, MS 472

L 写本 Paris, Bibl. de l'Arsenal, MS 3335

γ 系

C 写本 Paris, BN f fr 1579

M 写本 Turin, Bibl. Reale, cod. varia 151

その他

H 写本 Paris, BN f fr 12584

- (5) « Notre édition reproduit le texte du manuscrit de Cangé. Un très petit nombre de corrections y ont été apportées à l'aide des manuscrits apparentés *H* et *L* : ces corrections ne visent pas à établir un état plus ancien du texte ; elle réctifient seulement les erreurs matérielles qui nuiraient à l'intelligence du texte. » (*ROQ.*, vol. 1, 1948, p. XV.)
- (6) ラハマン法およびベディエの主張については、P. Bourgain et F. Vielliard, *Conseils pour l'édition des textes médiévaux*, Fascicule III (Textes littéraires), Paris : École nationale des chartes, Comité des travaux historiques et scientifiques, pp.14-19 が文献を紹介しつつ簡潔にまとめている。
- (7) ロックの『狐物語』校訂への直接の批判は、J. Rychner, « La critique textuelle de la branche III (Martin) du *Roman de Renart* et l'édition des textes littéraires français du Moyen Âge », *Bulletin de l'Institut de recherche et d'histoire de textes*, 15, 1967-68, pp.121-136. このリシュネルや Ph. メナールによる「ベディエ主義者」批判、特にロック批判を紹介して反論した論文に、N. Harano, « Le problème des principes d'édition », *Reinardus*, Special Volume (The Fox and Animals), 1993, pp.55-62 がある。
- (8) 注2を参照のこと。
- (9) 注1を参照のこと。
- (10) 画像は、フランス国立図書館のウェブページ Gallica よりダウンロードした。
<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b9009456v.r=roman+de+renart+371.langFR> (2014年10月27日参照)。
- (11) éd. M. Roques, *op. cit.*, t. III, p.116.
- (12) 山田壽訳「ルナールの冒険」『世界文学大系』65 (中世文学集), 筑摩書房, 1962, pp.368-397 (p.383)
- (13) G. ジョリーによると、-er 動詞の /r/ の消滅は13世紀末、G. Joly, *Précis de phonétique historique du français*, Paris : Armand Colin, 2004, pp.116sq.
- (14) N. Harano, *art. cit.*
- (15) H. Büttner, *Studien zu dem Roman de Renart und dem Reinhart Fuchs, I : Die Überlieferung des Roman de Renart und die Handschrift O*, Strasbourg, 1981. 図1には、この研究書のp.128の写本系統図から、本論で参照した写本の関係を再構成した。その際には、J. Rychner による系統図の再構成を参照にした (J. Rychner, *art. cit.*, p.122) を参照した)。
- (16) éd. N. Fukumoto, N. Harano et S. Suzuki, *Le Roman de Renart, édité d'après les manuscrits C et M*, 2 vols., Tokyo : France Tosho, 1983, 1985, t.1, Unité 1, v. 521-526 (p.17).

- (17) éd. E. Martin, *Le Roman de Renart*, 3 vols., Strasbourg : Trübner, 1882-87. 以下、MAR. と略し、引用参照の際は、次に枝篇番号、行番号を記すものとする。
- (18) M. K. Pope, *From Latin to Modern French*, Manchester University Press, 1952, § 877 (p.335) et § 1320 (Northern Region), vii (p.488).
- (19) *Ibid.*, § 839 et § 1320 (Northern Region), xii (p.488).
- (20) 例えば、Chrétien de Troyes, *Le Conte du Graal (Perceval)*, éd. F. Lecoy, 2 vols., Paris : Champion, 1972-75, vv. 6661-6663 : « [Gauvain] si s'an torne le chief bessié/ vers le chasne ou il ot lessié/ la pucele et le chevalier, [...] ». *laissé* は、乙女と騎士のうち、前に出てくる乙女に一致していると考えられるが、この形になっている。
- (21) éd. E. Martin, *Le Roman de Renart*, *op. cit.*, t.2, p.125 et t.3, p.118.
- (22) éd. et trad. J. Dufournet et A. Méline, *Le Roman de Renart*, 2 vols, Paris : Garnier-Flammarion, 1985, t.1, p.271.
- (23) H. Büttner, *op. cit.*, pp.58-80. 特に pp.58sq. と pp.72sq. を参照。
- (24) J. Rychner, *art. cit.* を参照。
- (25) M. Roques, « Introduction », in son éd. *Le Roman de Renart*, t.1, *op. cit.*, p. VIII.
- (26) H 写本の校訂に、dir. A. Strubel, *Le Roman de Renart*, Paris : Gallimard, 1998 があるが、引用箇所は、その第 IX 枝篇 (Le Viol d'Hersant) の第 375 行から 378 行にあたる。
- (27) F. Zufferey, « Pierre de Saint-Cloud, trouvère normand », *Romania*, 130 (2012), pp.1-39.
- (28) 私にはどうしても、この写本の解説ミスがマリオ・ロック自身によるものとは思えない。
- (29) A. Toblers et E. Lommatzsch, *Altfranzösisches Wörterbuch*, 11 vols., Wiesbaden: F. Steiner, 1954-2002, t.1, pp.157sq.
- (30) *Ibid.*, p.155,
- (31) M. Roques, « Introduction », in son éd. *Le Roman de Renart*, t.1, *op. cit.*, pp. Xsq.
- (32) J. Rychner, *art. cit.*